

及風大工を追って

北海道に渡った間瀬大工

第九回

山のみもとに深く入りこんだ函館港、山頂からの夜景は宝石箱をひっくり返したようなすばらしさ。海に続く坂道に、西洋菓子のような修道院。異国情緒的ロマンに満ちた街には、大勢の観光客の歓声に包まれていました。

山頂に佇むわたしたちは、夜景のすばらしさの中にとけ込むことはできませんでした。

見つめる視線は、遠く宙を舞い、そして海に続く間瀬の彼方に向けられていました。

函館の歴史はたかだか百三十余年、明治に入ってからです。明治二年開拓使文書に「函館以北は悪路でも馬も足を入れるところが無い。」とあります。

函館の街は、手操りのふるさと間瀬から出稼ぐ大工、そして漁師が中心になって拓いてきたと言っても言いすぎることはないでしょう。この出稼ぐ祖先の労苦に思いを馳せるとき、夜景のすばらしさに酔うことはできませんでした。そんな函館における間瀬大工の植音の軌跡を追ってみましょう。明治八年、こぼした火で焼土と

化したふるさと間瀬に帰ることもできず、一人の大工が西洋風の建築を請負完成させました。建造物は函館裁判所、大工は田中善蔵でありました。

「函館建築工匠小伝」には、—洋風大建築ヲ請負ヒ見事コレヲ完成セリ—と記述されています。

ここに注目されることは、善蔵の修業時代は間瀬大工の伝統的な堂宮大工技術の伝承であったであろうに、大洋風建築の請負であり、今はこの建築は現存せず、わたしたちは、函館市の公会堂の片スミに写真が置かれているのを確認しました。

北海道大学工学部、吉本真希子修士論文には—堂宮大工として修業を積んできたと考えられる田中善蔵がどのように大洋風建築に取り組んだのか、意匠上での設計への関与、特に擬洋風と呼ばれる建築の細部などにみられるような大工の恣意にもとづくデザインはあったのか。また堂宮大工の技術的裏付の必要あった構造を採用しているか等について確認することができない。—と論じられてい

ます。現存しない建物なので立証できません。しかしこの年代、函館における開拓使庁には、洋風建築設計能力はありません。

善蔵の力学的小屋伏せ、大工彫刻技量が、デザインのにも充分に通用し採用された可能性は大きい



函館裁判所写真—公会堂の片隅で見つけた。石垣は間瀬八幡社の石垣を髣髴させる。間瀬の石工が積んだのであろう。

ておった。ポロ、ポロで捨てた。—(タキ、和子談) これからも、間瀬大工の技量を基本にした工法がこの裁判所にも注入されていたであろうと、その思いを強くしました。

善蔵の生家幼名は判明しません。父乙蔵の長男として天保三年(一八三二)に生まれました。

叔父田中善蔵の四女と十七歳で結婚し善蔵を襲名しました。妻は姉さん女房の従兄弟同士の結び合いになります。

田中家祖先は、文化二年信州健命寺(石塚甚助、倚信)の棟札に小工匠として墨書されており、堂宮大工の系図であることが推測できます。

善蔵の技量と豊かな才覚は、さいはての地、蝦夷に駆り立てたのでした。それは、新しく明治が幕を開けようとしていた時代、年齢は三代半ばを数えていました。

新天地は優れた技量と才覚を必要としていました。善蔵は明治二年、函館招魂社、

函館八幡社を棟上げしました。これらの仕事によって—越後のハマ大工(間瀬)—の名は知れ渡ったということです。

そして優秀な技術者として、ふるさと間瀬から多くの大工、石工を呼び寄せました。

明治十一年函館博物館第一号館(文化財指定)を完成させました。しかし、間瀬大工の独自性のある技量を構造、デザインにも読み取ることはできません。

この年代に至ると設計書どおりの仕事及要求されたのです。これまで、堂宮大工として活躍してきた間瀬大工も新しい時代が到来し、仕事の内容も変化せざるを得ませんでした。

ハッタキ大工的な仕事を善蔵のプライドは許しませんでした。そして、明治十五年、仕事を止めふるさと間瀬に帰郷しました。

ここで函館における間瀬大工の系譜が消えてしまいました。しかし、善蔵の薫陶を受けた阿部久四郎らによって札幌へと移動し大きく開花して行くのでした。

明治二十二年から没する二十四年まで間瀬村初代村長を勤めました。

(岩室村生涯学習推進本部) (題字 高山雨徑さん)

※次号「間瀬大工を追って」は、特集のため休載させていただきます。